ナマースガ遺丘

――アナウ文化の再吟味――

角田文衛

【要約】遠古における東西文化の交流の問題を論ずる場合、アナウ文化のもつ比重は極めて大きいが、しかしこの文化の実体は餘り明かでない。なによりも必要なのは、アナウ文化の精確な編年を早急に樹立することである。そして近年発掘された中央アジア西南部のナマースガ遺丘は、この編年問題に鍵を与えるものである。そこで筆者は、その発掘報告に検討を加えながらナマースガ遺丘の諸文化を解説し、アナウ第三期頃の共同体の様相を具体的に究明すると共に、ナマースガ上層文化がアナウ第三期文化に平行し、中層文化がアナウ第二、三期文化間の溝渠を充たすことを明かにした。そしてナマースガ遺丘の三層に亘る文化には、さらにこれを細分し、精確な編年をうち樹てるに足る可能性が含まれていることを指摘して、次ぎに行われる具体的な編年論の下地を用意したのである。

一　はしがき

アナウ文化が遠古における東西文化の交流に演じた役割は、洵に重大なものである。殊に河南省や甘粛省において西方と関連の深い彩文土器が発見されて以来、その重要性はいたく強調されるに至つた。夙に一九二三年、アンデルソンはこの問題に触れ、『……しかしながら河南とアナウの彩文土器の全般的様相は、驚くほど類似しており、また共通した文様要素の例も数において著しいものがあるから、美術的意匠の伝播の可能性があるかどうかを問うてみるのは、当然のことである』[1]として両者を比較検討し、『既に闡明されている考古学的諸事実の助けをえて、多彩文土器の技術の伝播は、西方から東方へと行われ、その逆の方向でなかつたことが指示しうるのは、興味あることである』[2]

と結んでいるのである。

今日では、こうした伝播の事実はもはや学界の常識となつている。もとより重要なのは、彩文土器自体ではなく、それを指標として究明される文化の伝播の問題である。しかし彩文土器だけを採り上げてこの伝播の問題を議するにしても、これまでの行論は余りにも具体性を欠いていたように見受けられる。というのも結局、アナウ文化の編年が確立されないままに行論が独走しているからである。もはや今日では、各期のアナウ文化がいかにして成立し、どのように東方へ伝播したかを究めないでこの問題を議することは、殆ど無意味に近いのである。

周知のように、アナウ Anau 所在の二つの遺丘(テベ)は、一九〇四年にアメリカのペンペリー調査団によつて、シュミット Hubert Schmidt, 1864~1933 の指揮の下に発掘された。その調査報告は、全二巻の大冊として一九〇八年に刊行され、[3] また得られた遺物は、ハーバード大学のピーボディ博物館 Peabody Museum に収蔵されている。ソ連の学者は、右の発掘とその調査報告書にひどい悪罵を浴びせているけれども、一九〇四年（明治卅七年）の考古学界の水準を想起するならば、この報告書は、むしろ驚嘆に値する出来栄えであつて、帝政ロシアなどではこれに比肩しうるほどの報告書は遂に刊行されていないのである。

しかしながらこの報告書が出てから五十年の間に、考古学的調査は格段と精緻になつたし、またイラン、イラック方面の彩文土器の研究は、著しい躍進をみるに至つた。従つて碩学シュミット教授の手になる調査報告も不充分なものとみなされるに至つたのは、止むをえないことである。現在必要なのは、ペンペリーやシュミットの業績を罵ることではなくて、これら先学の研究成果を踏まえ、新しい調査結果をもととして信頼するに足るアナウ文化の編年を確立することである。この意味では、一九四九—五〇年に発掘されたナマースガ遺丘 Hamaɜra-tene の調査結果は、基本的重要性を帯びているのである。

無論、ナマースガ遺丘の意義は、単にアナウ文化の編年に奉仕するだけにあるのではない。それはまた中央アジア西南部における古代の共同体の機構を闡明する上でも、頗る重要視さるべきものである。そこで筆者は先ずこれら二つの問題を考慮に入れてナマースガ遺丘の文化を検討し、

ついで他の資料をも参酌しながらアナウ文化の編年問題と本格的に取組みたいと思うのである。

二　位置と調査経過

ナマースガ遺丘は、アナウ遺丘その他の一連の遺跡と共に、トゥルクメン共和国の南部、すなわちソ連とイランの国境をなすコペット・ダーク山脈 Копет-Даг の北麓地帯に位置している。カスピ海東岸のクラスナヴォッツクを起点としてタシケントに向うトゥルクメン鉄道は、この山麓に沿つて暫らく走るのであるが、ナマースガ遺丘は、アシュハバードの東南約一五〇粁のカーフカ駅 Каахка の西方七粁の地点で、路線に沿つてその南側に存しているのである。すなわち其処には南北に一粁ばかり伸びた自然の丘陵、すなわちナマースガ丘があり、その上には一五ほどの起伏がみられるが、それらのうち北部に存する高い丘が今回発掘されたナマースガ遺丘なのである。

一九一七年、ロシアの農業技師で考古家のブキニッチ Д. Д. Букинич は、始めてこの遺丘を見出して試掘したが、その後も彼は調査を続け、その示す文化がアナウ第三期文化と親縁であることを強調したのであつた。[4] 一九二八年の秋、ハヴェラン考古学調査団 Хавералнская археол. экспед. は、この遺丘を訪れ、セミョーノフ A.A. Семенов の指揮下に遺丘の実測図を作製したけれども、[5] 発掘までには至らなかつた。

一九四七年、トゥルクメン南部考古学総合調査団 Юж-нотуркменская археол. комплексная экспед. =ЮТАКЭ[6] が結成され、同地方の遺跡の総合的な踏査が開始された。この年、マッソン M. E. Массон 教授を隊長とする調査団の一調査隊は、アシュハバードからマールイ Марыに至る鉄道線に沿つて沿線の遺丘や高城の予備的調査を行つた。ナマースガ遺丘も、この際調査され、本格的な発掘計画が練られたことであつた。一九四九年から五〇年にかけて、リトヴィンスキイ Б. А. Литвинский を長とする別な調査隊は、この遺丘において待望の発掘を実施し、予想以上の成果を挙げたのであつた。その調査概報は、リトヴィンスキイによつて一九五二年に発表されたが、[6] 正式の調査報告書は、今日に至るまで刊行を見ていないのである。

ナマースガ遺丘の調査概報は、二三頁の短いものである

が、なによりもその要領の悪い記述が読者の統一的な理解を妨げている点が多い。それで筆者は、右の概報を解体し、新な整理を施しながら調査結果を概観することとしたい。

さて丘陵の北側には、二つの高い小丘が存している。発掘されたのは、そのうち東の方の小丘である。この小丘の頂部はやや平坦で、一三〇×八〇米の広さがあるし、また頂部は周囲の地面から一二米も高くなつている。発掘は、この頂部において行われ、その面積は約五〇〇平方米に達した。遺丘の頂上の地面から地盤までは、ちようど六米あつたが、発掘者は、五〇糎をもつて上から順々に地位を劃し、遂に第12地位にまで及んでいるのである。

第一号家屋　古代の包含層は、表土の直下に始まるが、その第1地位には、家屋の壁の土台や床が見出された。これを第一号家屋、または家屋Aと名づける。この家屋は、下にある第二号家屋の壁を土台に用いたり、また下の古い壁をつぎ足して自らの壁としている。その時期は、伴出した土器から想定されるが、この時期の保存のよい遺構は、この小丘の西に隣する小丘に存しているとのことである。

第二号家屋　家屋Bとも呼ばれるこの家屋は、第一号の直下に位置し、二七室が現存するアパート式の構造を示している。遺構の保存は、遺跡中で最もよく、出土遺物また豊富であるから、その記載は節を更めて試みることとしよう。

第三号家屋　発掘は、以上の地位をもつて中止され、その後は第二号家屋西北部の床面に四米四方の試掘溝を掘つて調査が進められた。試掘は、この床面から下方の地盤に至る四米に亘つて行われた。すなわちやはり五〇糎をもつて地位を劃し、この四米の深さに第4地位から第12地位に及ぶ8の地位を設定して探査が進められたのである。

第二号家屋の下方、すなわち第4、5地位には、煉瓦、土器破片などが混在し、第二号家屋を建てる際の埋立工事の跡をとどめている。狭い試掘溝のこと故、遺壁や床は現れて来なかつたが、この層にも家屋は存したに違いない。この想定上の家屋を第三号またはBと名づける。

第四号家屋　第6—8地位を占める第四号家屋（家屋I）の**L**状プラン（東北に面して）の遺壁が試掘溝内で検出された。壁の厚さは、五二糎で、陽乾煉瓦で築かれ、表面は漆喰で幾重にも塗られている。煉瓦の大いさは不定で、50×

27×13；45×23×10；44×24×10；42×27×12cmといつた寸法である。壁の土台は、煉瓦の破片を固めて作られている。東北軸の壁の一部は、南壁に近く切れて戸口をなす。この東北壁の両側には、部屋がしつらえてあつた。そのうち西側には、二つの部屋が南北に隣接して存在し、両者は戸口によつて相通じていた。以上二つの戸口には扉がとりつけられたもので、現に軸承孔の穿たれた石（但し、一つは挽臼を転用）が存している。また南の部屋には、南壁になかば嵌め込まれた爐があり、その周りには一五個のフリント製石器が発見された。なお床の厚さは、平均して二八糎である。

第五号家屋　家屋Ⅱとも呼ばれるこの家屋の遺構は、第8—10地位に亘つている。現れて来たのは、東北軸の遺壁である。その厚さは不定で、五七—六五糎である。築造に用いられた煉瓦の大いさも様々で、40×23×11；48×23×11；46×23×10cmの三種が区別される。壁の両側は部屋になつていた。壁には、部屋を結ぶ戸口が二ケ所あけられている。また壁の東北端に接してこれと直角に別な壁が東南に少しく張出し、その端は戸口をなすために切れている。東北軸の壁の西側には、壁に接して長めの半円形の壇cyΦaが設けられているが、その高さは四五糎である。壁は、漆喰で厚く塗られており、また床の厚さは二三糎である。

第六号家屋　家屋Eとも称されるこの家屋の遺構は、第10地位の下半から第12地位に亘つている。その床は、地盤に殆ど接して設けられた。溝内に見られたのは、東北に面して凵状を呈する三つの遺壁である。壁の厚さは、六五糎、また平行する二つの壁の間隔は、七〇—七五糎である。壁積みには45×24.5×10；44×24×10cmの二種の煉瓦のほか、小形煉瓦や半截煉瓦が使用された。南壁の南面の下方は、土器破片が外張りされ、その上を漆喰で塗つている。床の厚さは、一〇—一二糎である。平行する二つの壁と南壁で劃された部屋は、貯蔵室であつたらしく、果実の種子や羊の骨がここから発見された。

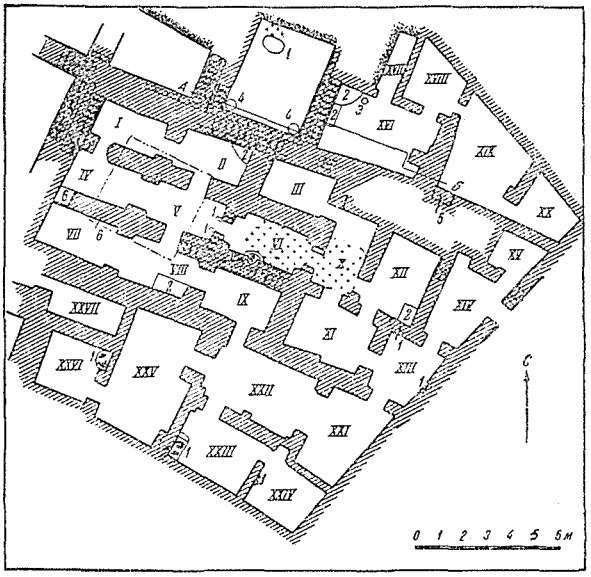
目下、我々にとつて最も関心の深い遺丘の下部が試掘溝だけによつて調査されたのは、いかにも残念である。しかしこの試掘溝を通じて相畳する家屋の遺構が確認され、かつまた地位に応じて土器に変化が見られることが明かにさ

れたのは、大いに多とせねばならぬのである。

三　第二号家屋の遺構

構　成　前に触れておいた第二号家屋の遺構は、第2、3地位に亘つて存してゐる。これは大きな塗籠式の建物の大部分をなすもので、そのうち二七室が明るみに出された

第一図　第二号家屋平面図



のである（第一図）。廊内には多数の部屋が設けられているが、通廊と称すべきものはなく、戸口によつて互に相通ずる型式がとられている。入口は、第14号室にみられる。建物全体の形は不整形であり、部屋の間取りも乱雑である。また建物は西南に面してはいるが、はつきりと方位に即して建てられてはいない。現存する遺壁の高さは、八五—一五〇糎である。

この建物の間取りを仔細に眺めると、二七の部屋が若干の群に分かれることが明かとなつてくる。そのうちでも建物の中核をなすものは、第1—9号室よりなる西北群であるが、この群の部屋の大いさは、平均して二・八八×一・七三米である。西北群に接して東南群（第9—12号室）がある。この群の諸室は、西北群の壁の延長線の内側に配されている。東方群（第13—15、21号室）の諸室は、大いさもプランも不同であるが、梯形に近いプランと言つてもよい。西北群の西南には、西南群（第22—27号室）、東北には東北群（第16—20号室）があり、北側には北方群の部屋が二、三明るみに出されている。

施工法　主要な建築材料は、苅を混入した粘土を陽乾に

した短冊形の煉瓦である。その大いさは、42×22×9.5；44×22×11；44×24×11；46×23×9.5；47×24×10；47×24×11～12cmといつたように様々であるが、概して4：2：1の比率であつたと言えよう。壁の厚さは、煉瓦の積み方の如何によつて相違している。すなわち長手積の壁では二五―三〇糎、小口積では五〇―五五糎、一段に一枚半を用いた厚い壁では八五糎である。後者の場合には、一段は小口積、次ぎの段は長手積というように、巧みな整層積の手法が用いられている。煉瓦積の手法の委細については、なお第一図を参照されたい。

壁にはしばしば短い張出部が添加され、両側からの張出部が戸口を形成し、部屋を仕切つている(例えば、第6号室)。戸口は全部で二六も存しているが、一般にその形状は整つていない。最も興味深いのは、第10、11、12号室に係かつているプランが凸字状の張出部であつて、それはまた迫持受の役割を果たしていたものと推測される。

第14、26号室の戸口に扉がとりつけられていたことは、明瞭である。第14号室の軸承石は、小臼の形で、高さは九糎、直径は上方で一五糎、下方で一三糎を算する。上面には、深さ四糎、直径八糎の半球形の孔が彫られている。これは戸口の閾の端に近くの床に、上面だけが顕れるように埋められていた。これは建物の正面入口の扉の軸を支えたものであつた。第26号室の閾には、軸承石として欠けた挽臼が転用されていた。かように戸口に扉をとりつけることもあつたが、多くの場合、戸口には蓆が垂れかけられていたもののようである。

建物全体に亘つて天井(屋根)が遺存している例がないので、天井についての精確な判断を下すことは容易でない。第5、6号室を仕切る張出部について吟味すると、上端に折れ目が痕づけられる。それは自らここに穹窿式の天井が架されていたことを想定せしめるのである。西北群の壁が部厚いのも、それが穹窿式天井を支えるためであつたであろう。また西北群の諸室を充たしていた遺物包含層には、煉瓦の著しい堆積が認められたが、これまた如上の想定を裏づけるものである。西北群を取りまく諸室については、穹窿式天井の存在を推知するに足る証跡は、なんら見出されない。これらの諸室には、丸太の棹縁(さおぶち)を渡した平な天井が架されていたのであろう。リトヴィンスキイは、第22号

室には、大局からみて天井がなく、それは青天井式の所謂『明小舎』であつたろうと推定しているが、筆者には彼がどういう根拠からそうした推測をなしているかが不明である。

各室の壁は、苟を混入した雪花石膏の漆喰で塗られたが、これには相当量の獣糞も混ぜられた。外界に面した壁は、漆喰を塗らぬのが恒であつたらしい。床は、苟を入れた粘土で固められ、その上面は、苟を入れた塗料で塗られている。床の厚さは、平均して一六糎である。

設備　室内の固定設備として挙げられるのは、壇、埋け甕 xyM, xyMur、竈、爐の類である。壇は壁に接して設けられていた。プランは、扇形または矩形である。第16号室には、扇形及び矩形の壇が北壁と西壁に接して造られている。第8号室の壇は矩形を呈し、寸法は七〇×一三五糎、高さが五五糎である。この壇の外枠は、煉瓦一枚の幅であつて、内部には煉瓦の破片や粘土が詰められている。壇の外側と、時としては上面とは、漆喰で塗られている。壇の外側は、煉瓦で積まれるのが恒であるが、第2号室の扇状の壇だけは、例外的に粘土だけで営まれている。

埋け甕には、大きな甕（腹部が円筒形）を口縁部まで床下に埋めたもの（北方群東寄りの室）と、把手のある壺を埋めたもの（第16号室）とがある。言うまでもなくこれらは、液体の貯蔵に充てられたものである。

室内には、しばしば竈の設備があつた。第一類は、押入れ式の竈である。これは大きくはないが、アルコーヴ式に深く壁に喰込んで作られている。この種の竈には、しばしば容器が置かれたと見え、第7号室ではかかる竈に六個の壺が存していた。第二類は、深く壁に喰込んではいるが、高さが低く、頂部が窄つている竈である。しかしこれは竈と言うよりも、実は壁に設けられた暖爐といつた方が正しいであろう。第三類は、第4号室に設けられた独特の竈で、それは床から六三糎の部位から始まつている。その壁に喰込んだ奥行は頗る深いので（七二糎）、竈の奥壁は非常に薄くなつている。この竈の最大幅は、六五糎である。また竈の底面は平であるが、框から奥行一四糎のところで底面は一段と高くなつている。竈のプランは正方形に近いが、底面と三つの側壁とは、直角をなして接することなく、滑かな流線形をなして淀みなく連続している。これは、祭壇に

でも使用された竈であろうか。

援暖や調理用に充てられた爐にも、三つの種類が認められる。第一類は、第二類の竈とされた暖爐式の爐である。この好例は、第6号室のそれである。ここではプランは円形を呈し、幅は下方で六七糎、上方で二〇—二七糎である。底部は、小口積の煉瓦で囲まれており、その内側の火処は焼土になつている。第二類は、壁に喰込んで作られた爐であるが、それは床から三、四〇糎高く位置し、頂部は穹窿状を呈している。第5号室の例をとると、それは床上三五糎にあり、幅は八六糎、高さは三五糎、奥行は、三五—四〇糎である。底の火処には、小石が敷かれている。第12、23号室には、この型式に属する大形の爐が存する。第23号室の爐では、火処が土器の大形破片で畳まれていた。第三類は、壁に近く、床上に設けられた簡単な爐である。第5号室には、前記のもののほか、本類に該当する爐がある。その火処は、小口積にした煉瓦で囲まれている。

埋　葬　床下に小児を埋葬する風習は、アナウ遺丘においても看取されたところであるが、[7] 第二号家屋でも、床下、壁の土台下または壁に接した床下に、一〇例に上る小児の埋葬が確認されたのである。それらはすべて、屈葬に附されていた。一体が坐形であるほかは、全部が横向きの姿勢をとつているが、埋葬の方向はまちまちである。また一例を除けば、遺骨は副葬品を伴つていなかつた。

これらの小児骨の調査は、人類学者ゼゼンコーヴァ B. Я. Зезенкова に委ねられたが、彼女の報告によると、第3号が8—10歳、第9号が6—7歳であるのを例外とすれば、全部の遺骨は、満一歳前後の嬰児のものである。またすべての頭蓋骨は、ユウロッペオイド的な長頭型を示し、そのうちでも地中海人種のザ・カスピ変種に近似しているとのことである。

変　遷　いま第二号家屋の歴史を辿つて見ると、先ず明かとなるのは、第三号家屋の廃墟を地均しした後に、始めて建てられたのは、西北群の諸室からなる建物であるということである。これらの諸室は、プラン、大いさ、壁の厚さの点で一定したものをもつている。この中核となる諸室に増築されたのは、第10—12号の諸室であつて、壁の接目は、今なお部分的に指摘されるのである。東方群、東北群、西南群、北方群の諸室が増築されたのは、かなり後になつ

てからのことであつた。時期を異にする増築であつたため、各群に用いられている煉瓦の寸法は、それぞれ異つている。また北方群の二室の床面は、爾余の群の諸室の床面よりずつと高く位置しているのである。西北群の西に接してまた若干の部屋があつたが、これは殆ど発掘されなかつた。その床面は、西北群の床より五〇糎も高いのである。発掘者は、西方の諸室は、母屋が永年に亘つて使用された後、恐らくはそれが崩壊し始めた頃に増築されたものであろうと想定している。

第二号家屋には、永年の使用期間において幾度となく増築、改築、修理が加えられた。例えば、第16号室の東南隅には、初め第三類の爐があつた。後になつて其処に壁がつくられ、この爐は暖爐式（第一類）に壁中に抱かれるようになつた。同じ頃、第16号室の西北隅には、扇状の壇が営まれ、それに接近して把手のある大きな壺が埋け甕として床下に埋めれ、最後に矩形の壇が西壁に接して設けられた。またそうした工事に際して、壁も床も一再ならず更新されたのであつた。

第二号家屋が大体において廃棄された時からそれが完全な廃墟と化する時までの期間は、五つの時期に区分することが出来る。第一期には、家屋はまだ屋根を戴いていたが、床は鐘乳石質の細粒で覆われ始めた。但し、幾つかの部屋が居住に使用されることもあつた。第二期には、穹窿式天井が崩壊し、莫大な量の煉瓦が室内に堆積した。第7、8号室に新来の人々が居住することもあつた。第四期には、家屋の大部分は埋もれ、その上に第一号家屋が建てられた。但し、第4号室の堆積物で高まつた新しい床面には、人間が住んだ形跡が窺われる。第五期には、家屋は完全な廃墟と化したが、その頃、第一号家屋も廃棄されてしまつた。以上にみるように、第一号家屋は、第二号の荒廃直後に建てられたのではなく、両者の間には、かなりの年代的な溝渠があるのである。

考　案　発掘者リトヴィンスキイは、第二号家屋について様々な考案を提出している。いまそれらを要領よく纏めて紹介しよう。

ナマースガ遺丘の文化層は、六米に達しているが、発掘者はこれを上層、中層、下層に三分している。上層は、第1地位から第3地位までである。ナマースガ上層文化は、

アナウ第三期文化に平行するものであり、技術史的には、青銅器時代に比定されるのである。そして第一、二号家屋は、まさにこの上層文化を代表しているのである。

さて同時性の問題を厳密に言わないならば、第二号家屋と構成的に相近い類例は、ペルセポリス近傍のバクン遺丘 Tall-i-Bakun やホレーズムのジャンバス・カラ Джанбас-кала 遺跡その他に求められる。また類似した家屋は、山地タジック人の間では、現在なお使用されているのである。例えば、山地タジック人のヴァヒオ・ボーロ族 Вахно-бого には、一二一平方米の大いさの一宇の家屋に、五四人の家族員が居住しているが、そこに見られる家族形態は、家父長制大家族である。[8] そうした資料から推測するならば、第二号家屋は、必ずや大家族の住居であつたと考定される。家屋内の若干の部屋を除けば、各室は小家族の住居に充てられたものと思料されるのである。

幾つかの部屋は、居室ではなく、特別の目的に使用されたらしい。例えば、第5、12、23号室には、調理用の大きな爐が存するが、恐らくこれらの諸室は、炊事用のものであつたろう。また第10、11号室は、全員が列席する儀式的な饗宴に充てられたのではなかろうか。これらの両室の床には、食事の残滓が他のどの部屋よりもずつと数多く散乱していた。床に散らばつている獣骨の間には、人間の頭蓋骨(少くとも四個分)の破片や四肢骨の部分も混じていた。これらの頭蓋骨はわざと砕かれたものであり、その破片は、内外両面とも焼かれている。また一頭蓋骨には、存命時に鋭い武器（矢?）によつて貫通された三角形の傷痕が認められる。また両室からは、赤い顔料を容れた完形の深鉢形土器一個と、この顔料が附着した土器破片一個が出土している。骨を割つた大形の礫も、いくつかが両室の床上で発見された。正面玄関にあたる第14号室の床上には、多数の土器破片が散乱していた。これまた居室ではなかつたであろう。なお第24号室では若干の磨き石が、また第20号室では幾つかの挽臼が発見された。しかしこれだけの事実をもつてしては、第20、24号室の用途を判定することは困難であろう。

発掘者の提示した考案は、おおむね妥当であり、無理がないように思われる。複雑な構成をとる大家屋の発見は、それに加えられた適切な考案と相俟つて、古代の共同体の

研究に寄与するところが甚だ多いのである。

四　上層文化の土器と石容器

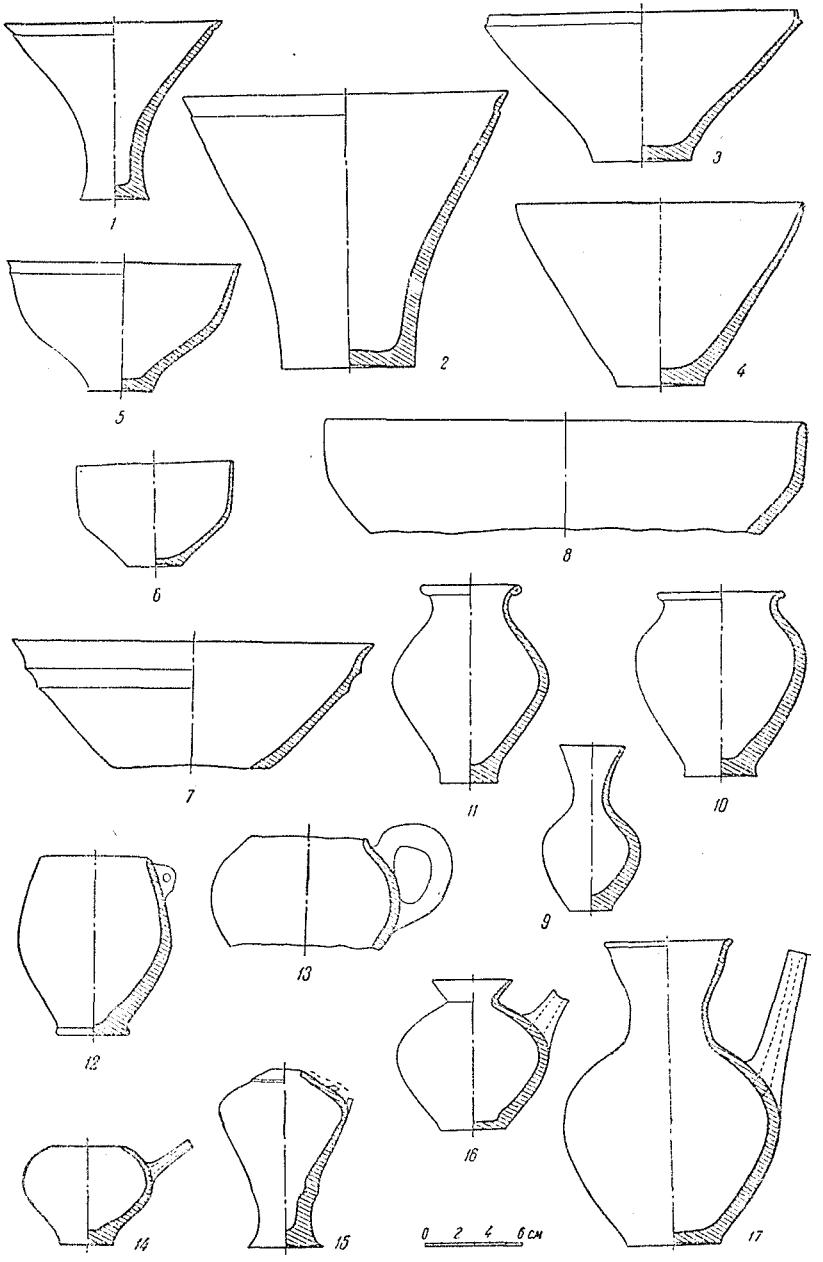
遺物の記述　発掘者リトヴィンスキイは、『紙幅に余裕がない』ことを理由に、出土遺物を略記しているが、それにしても彼の記述はしばしば要点を漏らし、我々を困惑させることが多い。なによりも困るのは、出土した地位を明記せずに遺物を記述する場合が多いことである。例えば、銅製短剣の如きは、最も重要な遺物とされるが、その出土地位はどこにも記載されていないのである。凡そ土器を記述する場合には、必ず触れておかねばならぬ項目は幾つか存するのであるが、彼はそうした重要項目には無頓着であるかのように見える。上層出土の素文土器（単色土器）は、明かに精製、粗製の二種類に分けられる。しかし発掘者は、両者をはつきりと区別せずに記述を進めているのである。紙幅が限られていることは、かような欠陥のための遁辞とはならぬであろう。それで筆者は、彼の記述をもととしながらも、実測図を自らの眼で眺め、もつて要をえた記述を以下に試みようとするのであるが、そこには自ら限界があることを予め含んでおいて戴きたいと思う。

土器の分類　上層（第1—3地位）からは、多数の土器が出土したようである。これらの土器は、第一類（粗製土器）、第二類（精製土器）、第三類（彩文土器）の三類に区分されるが、第一類と第二類との量的な比率は、筆者には不明である。

粗製土器　中形、大形の粗製の土器で、夥しく出土したという。篦磨きなどの施されない粗雑な肌面を有する。水甕、貯蔵用、炊事用などに用いられたものらしい。大形の炊事用の鉢形土器、鍋形（鍑形）土器（時として筒状の注口がある）、把手のある大きい壺形土器、腹部が円筒状に細長い貯蔵用の甕形土器、樋状の注口のある甕形土器などの存在が知られるが、なおこのほかに様々な形態の鉢形土器があると言う。胎土については不明であるが、芻や砂粒の混入した粗い粘土が用いられたのであろう。成形には轆轤が使用されたらしいが、これまた委細は不明である。

精製土器　最も多いのは、口縁部が朝顔花状に開いた土器である（第2図1、2）。大いさは一定していないが、小形、中形に属するものらしい。時としては、器壁がひどく

第二図　ナマースガ上層文化の精製土器



薄い例がみられる。形態の上でこれに近いのは、若干の鉢形土器で、それは口縁部が段をなし、口端が直立している（第2図3）。以上のほか三つの基本形態に編入することの出来る相当数の鉢形土器がある（第2図4—8）。また夥しく存するのは、中形、小形の壺、甕の類（第2図9—13）であり、また注口が筒状の注口土器（第2図14—17）である。出土数の少いものは、口縁部が殆ど直立した大きい浅鉢形土器（第2図8）、口縁に近く、水平な二条の隆起線をめぐらす鉢形土器（第2図7）、小さい皿形土器、土製台脚などである。また『篩』(ふるい) cuttoと呼ばれる土器も幾つか出土した。実測図が掲げられていないので、その実体は不明であるが、多分それは、ヒッサール遺丘Tepe Hissar などから出ている所謂『火鉢』brazier（多孔の台付土器）をさしたものであろう。[9]

精製土器には、底面に渦文を刻した例がある。精製、粗製両土器とも殆どすべてが無文であるように見える。実測図にも文様は表出されていないし、また発掘者も文様については、縦枝状文が稀に刻された例があると簡単に述べているだけである。更に彼は、素文土器の色調——これはイラン文化圏の土器については重要な問題であるが——を全く記述していないのである。精製土器の大部分は、轆轤製であつたらしい。精製土器、殊に器壁の薄い土器の胎土は、非常によく精選されており、また焼成も堅緻であり、その破片を叩けば金属音が出るとのことである。器面は一般に篦磨きが施され、美しい光沢を放つ例もあるようである。なお精製土器のうちには、獣形装飾や円錐形土製品を肩部に貼りつけたり、注口を雄山羊の頭の形に作つたりした装飾土器も存している。

彩文土器　僅かながら出土したと記されているだけで、実測図も掲げられていないから、詳細は全く不明である。アナウ第三期文化の彩文土器から類推するしか仕方がないであろう。

石容器　明白色の半透明な石（大理石や雪花石膏のことらしい）を削り作つた石容器は、かなり多数出土したようである。大いさは様々で、高さが二・五糎のものから一五糎に達するものまである。概して形態は、小瓶の形をとつているが、坏形をなす例も見受けられる。石容器は、殆ど例外なく、著しく外反した口縁部をとつている。またその製作

に際しては、原石のもつ斑色の石理が巧みに利用された。オリエントでは、石容器の伝統は土器よりも古く、それだけに完成したその技法は、ナマースガ遺丘のような周辺においてすら見事な作品を産み出している。しかし石容器がアナウ、ナマースガ両遺丘とも、古い方の文化層に検出されないことは、注意さるべきである。

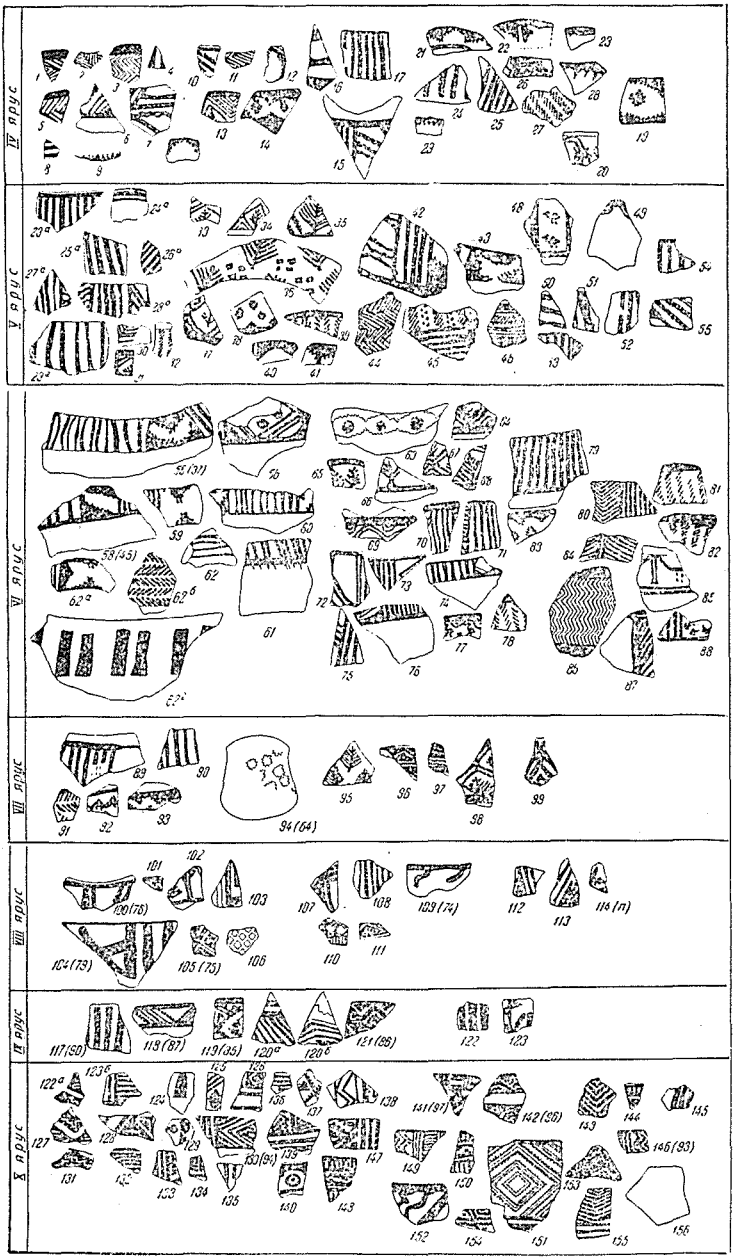
五　中・下層文化の土器

土器の種類　土器には、粗製、精製、彩文の三種類がある。しかしリトヴィンスキイは、これら三者をはつきり区別しないで記述している。また彼は、形態と彩文の上から試掘溝の土器は、中層（第4—10地位）と下層（第11、12地位）の二群に大別される可能性を説いているけれども、意識的にそのような見地から土器を記述してはいないのである。

筆者は、下層から中層に至る土器の変化を幾つかに細分しようとする意図を抱いている。しかしここでは、余り先走りした記述はわざと控え、リトヴィンスキイの線に沿い、これに多少の修整を加えながら説明して行きたい。

粗製土器　出土量、色調などは、不明である。胎土には、繊維の混入が認められる。大形、中形の粗製土器を通じて最も優勢なのは、外方へ突き出た、部厚くて大きい口縁部をもつた甕形土器である。[16] 多くの場合、口端は水平で平たく作られている。また特色あるものとしては、口縁部が『く』字状に鋭く内曲した深鉢形土器があげられよう。下層においては、大形のものにすらしばしば彩文が施された。

精製土器　上層に普遍的に見られた鉢形土器は、中層からは極く稀にしか出土しない。中層において一般的に見受けられるのは、接底部または脚部に平行太形凹文を水平に繞らした台脚をもつ黒色の深鉢形土器、小さいが、しかしひどく肥厚した接底部を有する深鉢形土器、腹部が張つて水平の稜をなす、つまり『く』字状の断面を示す無頸の壺などである。後者は、下層に進むに従つて口縁部の内曲度が減少し、下腹部が短くなり、遂にアナウIb式に典型的な椀形土器に達するのである。鉢形土器も、稀ではない。その特徴は、垂直の、または外反した幅広い彎曲した口縁帯をもつことである。注口土器は、第6地位に至つて始めて出土するのである。鉢形土器では、一例だけ丸底が知られている。なお下層の精製土器のうちには、鏡のように黒光り



第三図　ナマースガ中層文化の彩文土器（上方の第4地位より第10地位に至る）

する器面を有するものも存している。

彩文土器　試掘溝においては、彩文土器が優勢である。殊に下層では、それは量的に圧倒的である。尤も、質的に言えば、彩文土器は精製土器よりも劣つている。その形態については報告には明記されていないが、主なものは、鉢、椀、甕の類であつたらしい。

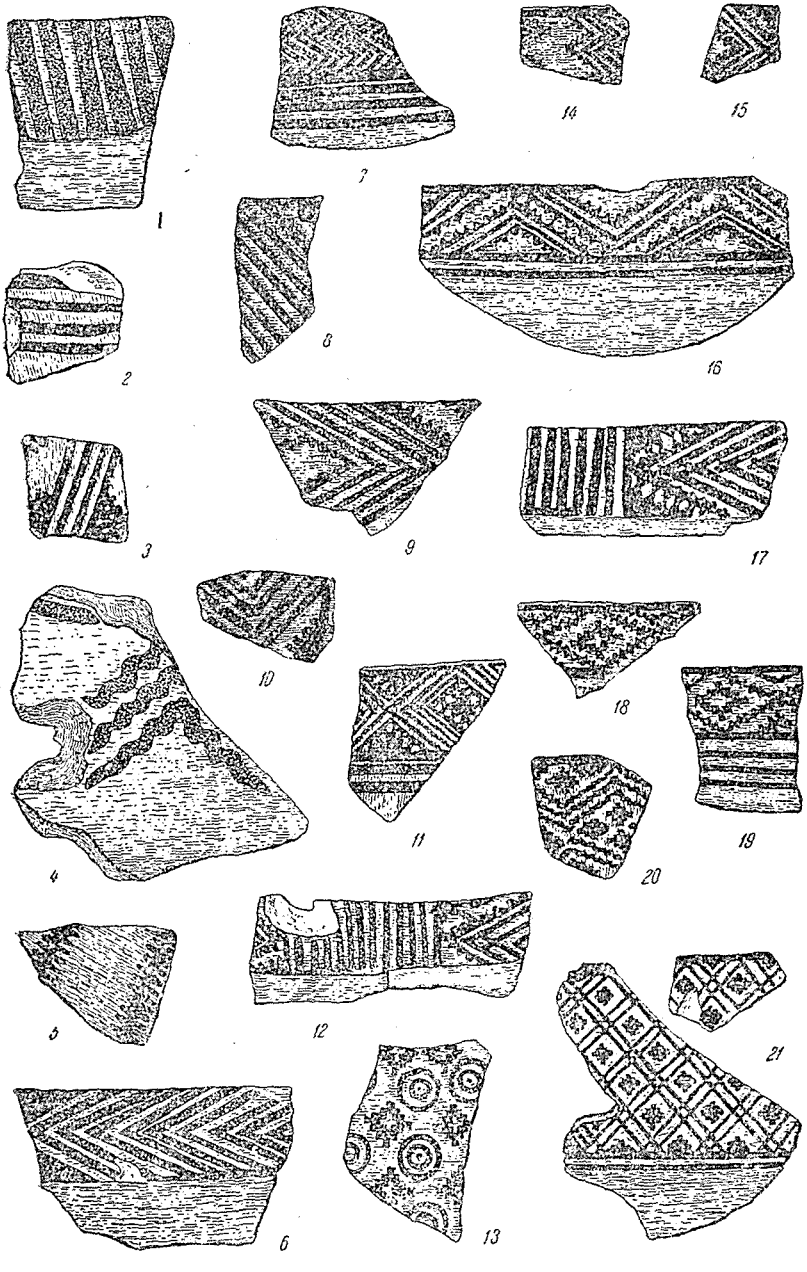
彩文は、明色、時としてはクリーム色の粧土に褐色、稀には黒褐色の顔料で施されるか、或いは赤い粧土に黒褐色または黒色の顔料で描かれた。後者の場合、土器はしばしば光沢ある器面を示している。原則として、彩文が施されるのは、土器の上半部に限られている。下層になると、赤い粧土をもつ彩文土器が増加し、また褐色や黒色の顔料を用いた多彩文土器も現れて来るのである。溝線に顔料を充塡して装飾とする incrustation 法による土器が中層下部に存するのは（第3図94、106）、特筆さるべきである。

彩文の文様的構成は、かなり複雑である。中層の土器群にあつては、基本的な文様は平行線文であつて、これを巧みに駆使して種々様々な文様が構成されている。平行鋸歯や列点文などは、平行線文の変種と言えよう。また星状の斑点を配置した文様や同心円文なども注意される。この群の土器を下層の土器から区別する有力な特徴は、形象文の愛好である。形象文としては、雄山羊（第3図20）や鴨（第3図48、77）を描いたものや、樹木文（第3図33-37、63-68、-、95、98）がある。また樹間に山羊を配して絵画的文様構成をとつている例も見受けられる。下層の土器にあつては、複雑かつ豊富に用いられた幾何学文が特徴である。同心円文、波文、鋸歯文、市松文、平行線文、星文といつたものが単独に、或いは組合せて用いられ、複雑な構成が作り出されている。二本の長い平行線間を短い多数の平行線で充たす所謂『梯子文』も、下層の彩文土器の有力な特色をなしているのである。

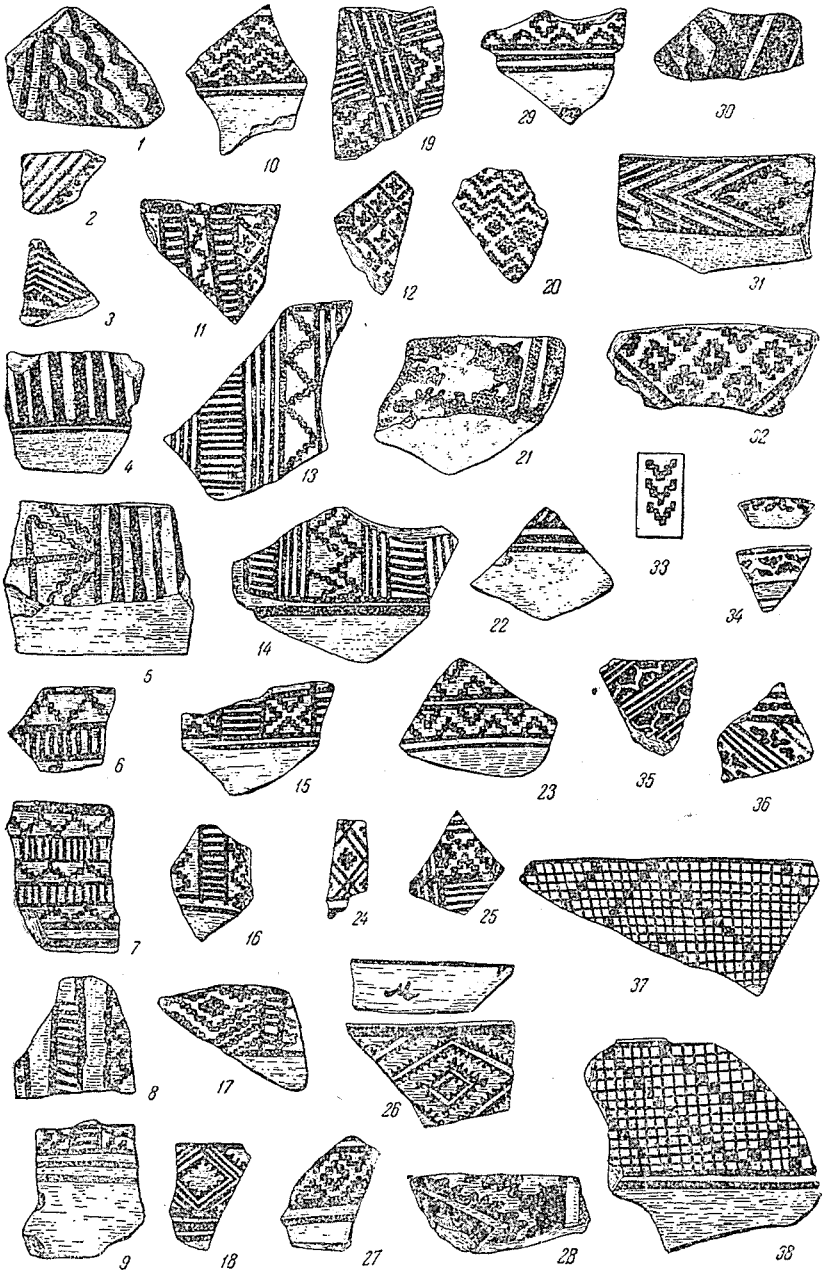
六　石器・金属器・その他

石　器　石器の数は夥しいが、それは各地位から出土したようである。石器がこの地で製作されたことは、プリズム状の石核や石屑の数多い出土からして明白である。剥片を用いた刃器も多いが、そのうちの若干は、鎌刃に使用されたことであろう。また剥片を用いた掻器様の石器も少く

第四図　ナマースガ下層文化の彩文土器　(一)



第五図　ナマースガ下層文化の彩文土器（二）



ない。非常に石量の多いのは、両面加工の石鏃である。大いさは二・二―五・五糎で、柳葉形または三角形を呈する。有柄式の石鏃は一例発見されただけで、他はすべて無柄式であり、基部は尖つているか、または円くなつている。製作はさほど良好でなく、左右均斉の美しい修整は見られない。数の上で多いのは、石弾であつて、卵形や球形をとつている。球形のものでは、上端と下端とが平に切りとられている。大形の石器としては、粗末な石斧（打製か磨製か記されていない）、挽臼、軸承石、石鍬などがあるが、それらのうちには、ヒッサール遺丘出土の石器[11]と型式的に相近いものがある。

金属器　リトヴィンスキイは、金属器の出土量や出土層について言及していないが、恐らくそれは、全地位から少量づつ出土したものであろう。知られていたのは、銅（青銅？）の冶金術である。この地において金属器が鋳造されたことは、出土した金屎から立証されよう。出土をみたものは、葉状の短劔、錐、基部の肥厚した針（孔はない）、曲つた柄をもつ刀子の断片などである。

土製品　土製の匙、紡錘車、偶像などは、主な土製品である。『指当』は、バクン遺丘でもその出土が知られているが、これは指につけ、鎌を扱う際に指を保護するものである。リトヴィンスキイは、土製の家屋のモデルを近辺で表面採集した。これはプランについて、第二号家屋などに相通ずるものがある。さらに履を模した土製品が存している。これは先端が折曲つた型式に属している。

装身具　装身具は豊富に出土したが、種類もかなり多い。材料は、天藍石その他の石である。これを様々に加工して、玉、緒孔のある玉や環が作られた。装身具のついでに述べておきたいのは、金属製印章の数々である。その型式は、アナウ遺丘発見の例に甚だ近似しているのである。

七　生業と宗教生活

農耕　ナマースガ遺丘の住民の基本的な生業は農耕であり、ついで牧畜であつた。農耕の営為は、多数の挽臼、土製の『指当』、石鍬、煉瓦や漆喰壁に苫として混入された麦藁などから容易に立証されよう。但し、その型式は、終始して耨耕であつた。発掘に際してはまた莫大な量に上る穀粒が採取されたが、それから推すならば、栽培されて

いたのは、大麦、小麦、稀にライ麦であつた。また豆や葡萄も栽培されていた。

牧畜　家畜類の遺骨は、夥しく出土した。それらは、羊、山羊、牛、駱駝のものであるが、また家犬の遺骨もあつた。多数の石鏃が出土したことから思料するならば、狩猟がまだ副業として行われていたことは、疑う余地がない。特に鳥撃ちは旺んであつたようで、土器に見られる鴨の文様も、これに関連して考えらるべきであろう。

手工業　手工業は、かなりの水準に達していた。見事な精製土器や美麗な彩文土器の製作は、特別な工匠、すなわち土師の存在を前提として可能であつたに相違ない。冶金術も銅製印章に関する限りでは、相違な発達を示していたが、これまた特別な工匠によつて製作されたに違いない。

宗教生活　宗教や美術に関連して先ず採り上げられるのは、多数出土をみた土製の人像である。これらの土偶は、二群に大別される。第一群の第一型式は、腕のない扁平な胴体をもつ像であつて、下半身は省略されている。頭部には、目鼻立は表されていない。基部は平で、立てておけるように作られている。第二型式は、ざつと目鼻立をつけた顔、細長い胴部をもつた像であるが、両腕が横に突出ており、また胸部に乳房が表されている点が注目される。恐らく第一の型式に対して第二型式は、婦人を表したものであろう。第二群は、頭部を欠いたヴァイオリン形の像で、その製作は頗る稚拙である。第7地位から出土した第二群の女人像は、未焼成の土偶であつた。以上に述べた人像が装飾品の類ではなく、崇拝の対象であつたことは、更めて指摘するまでもなかろう。特に第6号室の炉辺に、この種の土偶がかたまつて発見されたことは、注意さるべきである。

獣形土偶は、独立の土偶としては作られなかつたらしい。犬、羊（？）、牛首などを表した土偶は、装飾土器の附属物であつたし、また山羊の首の像は、土器の注口の部分をなしていた。装飾土器に用いられた円錐形の附属物をもつてリトヴィンスキイは、陽物崇拝の証拠としているが、果たして如何なものであろうか。蛇や樹木が何等かの宗教的意義を有していたことは想定されるけれども、これについて遽かに結論を出すのは困難である。樹木の間に、死んでいる山羊を配した図案は、甚だ象徴的であるが、どのように解釈したらよいであろうか。土製の車輛は、多数発見さ

れている。車輛が祭祀的な意味をもつていたことは、これによつて、おぼろげながら想像されるのである。死者、特に嬰児の遺骸を床下に埋葬する風は、この遺跡のみに限つてはいないが、これまた特殊な信仰に由来していることは、疑いを容れぬのである。

八　結　び

再三指摘したように、ナマースガ遺丘の発掘についてのリトヴィンスキイの報告は、極めて要領のえない、粗雑な労作である。よつて筆者はこれを全く解体し、要点を逸さぬようにして発掘の成果を解説したのである。ナマースガ遺丘は、アナウ文化を再吟味し、その精確な編年を樹立するためには、現在知られる限り、最も重要な遺跡である。またそれ故に筆者は、煩を厭わずに委しくこれに解説を試みたのであつた。この解説によつて得られた二つの大きな収獲は、㈠アナウ第三期頃の共同体の実体がかなり具体的に先明されたこと、並びに㈡アナウ文化の精確な編年をうち樹てるための手掛りがえられたことである。

ナマースが遺丘を最初に調査したブキニッチは、この文化とアナウ第三期文化との驚くべき親近性を指摘し、さらにナマースガ遺丘の下層には、アナウ第一、二期に比定さるべき文化が発見されるであろうことを示唆したが、これは当時としては非常な卓見であつた。

今次の発掘報告を瞥見しただけでも、ナマースガ上層文化がアナウ第三期文化に該当することは容易に窺知されるのである。また下層の彩文土器に盛行している梯子文だけをとつてみても、この文化とアナウ第二期文化との関連性は想定されるのである。周知のように、アナウ第二期文化と第三期文化との間には、大きな溝渠が横たわつている。[12] リトヴィンスキイが、ナマースガ中層文化こそはこの溝渠を充たすものではないかと想定した点は、多くの学者の賛同をえたに相違ないのである。

いま第三図をよく眺めてみると、ナマースガ中層文化自体にも、上下による変化が認められる。また第四、五図をみても、そこにアナウ第一期の彩文土器に比定されるものと、第二期に擬されるものとが混在していることが気づかれるであろう。つまりナマースガ中、下層文化には、更に細い時期が設定される可能性が泛び上つて来るのである。

そして恐らく細分の必要は、上層文化についても言いうるように思われる。換言すれば、ナマースガ遺丘の発掘調査を契機として、アナウ文化の精確な編年の樹立は、可能となつたのである。リトヴィンスキイ自身は、その概報においてそうした細分の問題には触れていない。事実、ナマースガ遺丘は如何に重要であつても、この遺跡だけによつて右の問題を解決することは出来ないのである。

幸にもトゥルクメン共和国においては、近年、類似の遺丘が不完全ながらも調査されるようになつたし、また特にイランの遠古の文化の研究は、一九三〇年代から長足の進歩を遂げたのである。従つてこの編年問題の研究は、その方面の幾多の遺跡の調査結果を充分に参酌して推し進められねばならぬのである。とすれば、アナウ、ナマースガ両遺丘の調査結果を踏まえ、他の夥しい遺跡を考慮に入れるとして、それは具体的にどのように試みられるであろうか。筆者が稿を更めて次ぎに展開しようとするのは、実にこの具体的な行論にほかならないのである。

註

① Andersson, J. G., An Early Chinese Calture(Peking,1923), p. 35；三森定男訳『支那の原始文化』(東京、昭和十六年)、五二頁。

② Ibid., op. cit., p. 42；三森訳本、五九頁。

③ Pumpelly, R. (ed.), Explorations in Turkestan. Expedition of 1904. Prehistoric Civilization of Anau, 2 vols.(Washington, 1908).

④ Бубнич, Л. Л., История первобытного орошаемого земледелия в Закаспийской области в связи с Вопросом о происхождении земледелия и скотоводства (Хлопковое Дело, 1924, No 3～4); его же, Некоторые новые данны об Анау и Намазга-тепе (Туркменоведение, 1929, No 5).

⑤ Семенов, А. А, Древности Абшеронского Района (Труды Среднеазиатского гос. ун-та, серия II, Orientalia, вып. 3, Ташкент, 1931, стр. стр. 9～10).

⑥ Литвинский, Б. А., Намазга-тепе по данным раскопок 1949～1950 гг.(Советская Этнография, 1951, No 4, Москва, 1952).

⑦ Pumpelly, op. cit., vol. I, pp. 112, 122.

⑧ Кисляков,Н. А., Следи первобытного коммунизма у горных Вахно-бало (М.-Л., 1936), стр. 60.

⑨ Schmidt, E. F., Excavations at Tepe Hissar, Damghan (Philadelphia, 1937), pp. 307 ff.

⑩ Arne, T. J., Excavations at Shah Tepé, Iran (Stockholm, 1945), p. 251；figs. 249, 250.

⑪ Schmidt, E. F., op. cit., pls. LXI, LXII.

⑫ Pumpelly, op. cit., vol. I, pp. 175 ff.

subjected *Kona,* consisted of the unit community in payment of the land-tax, was called *Shigô* (枝郷); which consisted of the *Kona* rank and the village rank. The relation of *Shigô* (枝郷) in the village rank with *Moto-mura* (本村) was called *Uchiwake-mura* (内わけ村).

Tepe Namazga

——Reexamination of the Anau Culture——

Bunei Tsunoda

The entity of the Anau Culture is considerably obscure in spite of its enourmous gravity as to discuss the problem of cultural exchange between the West and the East in early ages. The urgent need of all is to establish its precise chronology upon the firm ground. For the solution of this chronological problem, Tepe Namazga, recently excavated, will furnish a key, which lies in the south-western border of Turkmen.

Examining the preliminary report of excavations excuted there, the present writer expounds those sequented cultures of the site, surveys concretely the real aspects of a community found therein which is dated the age of the Anau III culture, and, on the other hand, explains the facts that the latest culture of Tepe Namazga should be paralleled with the Anau III culture and the middle culture could fill the hiatus existing between the Anau II and III cultures. He pointed out, then, the possibility to classify more acurately cultural sequence of three strata of Tepe Namazga and to establish thereon the precise chronology of the Anau Culture in order to prepare the necessary ground for concrete augment of the problem.